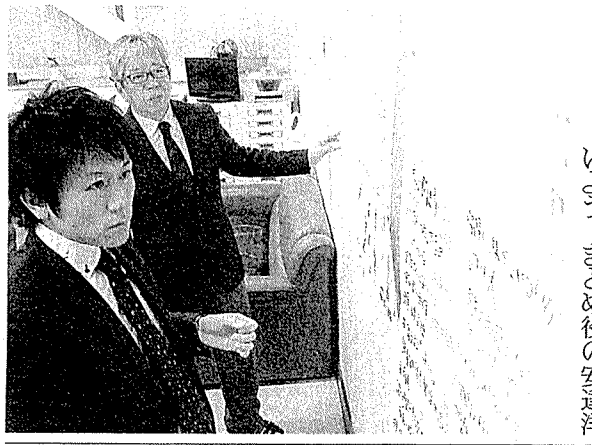
先輩教員、若手指導力磨く

教育ルネサンス

公立学校でベテラン教員が続々と定年退職を迎え、新規採用が増えるなか、横浜市立校では、教員同士が学び合うOJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング、職場内訓練）によって指導力を向上させる取り組みが進む。（大垣裕）

採用増える現場で工夫



校長室に貼られた模造紙には教員たちの意見が書き込まれている（横浜市立白根小で）

「見合いは5分からでもOKにしましょう」。磯子区の洋光台第二中学校（狩野久幸校長、生徒341人）では10月、教員が空き時間に他教員の授業を参観する「授業の見合い」を始めた。多忙な教員の負担にならないよう、まとめ役の安達洋子副校長は「無理のない範囲で」と呼びかける。

同校の教員の年齢構成は20、30代の計10人に対し、50代が11人。40代は2人と中堅どころがぽっかり空いた状態。一方、学力テストの結果では、生徒が主体的に課題を解決する能力をさらに伸ばす必要性が指摘されており、各教員の授業改善が求められるという。

「見合い」では例えば、美術のベテラン教員が学校図書館で廃棄される絵画全集のページをバラバラにして、生徒たちに自由に触れさせる授業を展開。見学する教員は生徒の表情や反応を見て、ベテランの「技」を自身の授業の参考にする。

また同校は、空き教室にパソコンとプロジェクターを常設し、授業で利用できるICT（情報通信技術）専用ルームをつくった。図書館では「戦後70年」「女性の社会進出」など学校司書がテーマ別に新聞記事をスクラップして生徒の調べ学習に備える。こうした「お膳立て」によって各教員の授業づくりの省力化を図っている。

若手の先輩教員が新人教員らの相談に乗る「メンターチーム」も組織して研修を行い、同じ教科の教員が休み時間に顔を合わせたら「立ち話会議」で話し合う。狩野校長は「忙しいなかでも時間を捻出し、板書して生徒が聴くだけの『チョーク&トーク』から脱却しなければ」と語る。

学力向上へ 意見を共有

旭区の白根小学校（持丸隆一校長、児童632人）は今年度、30、40代の学年主任ら8人が「学力向上プロジェクト」を発足させた。「できることから始めよう」と月1回、戦略会議を開催。会議の場となる校長室には「学習に集中させるための工夫」「『できた！』という喜びや意欲につながる指導支援の工夫」などと書かれた模造紙が所狭しと貼られ、教員たちの意見が書き込まれている。

学力テストを通じて浮き彫りになった同校の課題は、基礎基本の定着。プロジェクトのメンバーは、学力の向上には家庭学習の習慣づけが重要と考え、これまで担任と保護者で行っていた個人面談だけではなく、高学年では児童も交えた三者面談を取り入れた。

同校では、児童が日々返却されたテストを1冊のファイルにとじていて、面談では児童の声を聞きながら、このファイルを基に個々の課題を具体的に話し合うようにしたという。

全教員の年齢構成を見ると、20代が7人と最も多い。プロジェクトリーダーの片山圭祐教諭(33)は「一朝一夕に効果は出ないが、目標を共有することで若手も授業の進め方が明確になる」と話す。持丸校長は「ミドルリーダーを育成してベクトルをそろえることが、学校を変えることにつながる」と考えている。

岡本太郎と中村正義『東京展』㊥

民族学 自身の「仮面」に

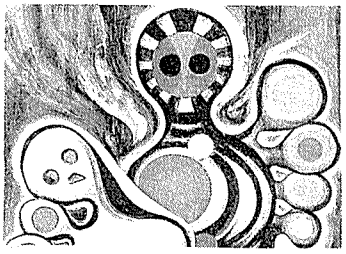
本作は、岡本太郎（1911～96年）が75年の「第一回東京展」に出品し、第一室に展示された作品です。虚空に浮かぶ登場人物は大きな足の裏のような形で、親指の部分が顔になっています。

向かって左手の小さな人物は白くて柔らかい体つきの女性、背後に立つのは男性でしょうか。ちりばめられた原色の丸や白黒の縞が装飾的で、まるでオセアニアの民族学的な仮面を連想させるようです。

戦後のアバンギャルド芸術の旗手として活躍した岡本は、61年に所属していた二科会を脱退。70年の大阪万博での「太陽の塔」を経て、以降は顔や目玉をモチーフに、自己模倣といわれるほどに本作のような作品をくり返し描き続けました。

その根幹にあるのは、若き日に留学したパリで絵と共に学んだ民族学への関心でした。岡本の絵画は、そうした思想に裏打ちされた彼自身の一種の「仮面」でもあるのかもしれません。

（川崎市岡本太郎美術館　学芸員　佐藤玲子）



「岡展」（川崎市岡本太郎美術館）は11月11日（04月曜と休館日）へ。